

# 紅い花

## (十)再会

琉 紅

(十) 再会

一ヶ月が過ぎた。

真昼というのに、僅かな光の差し込む余地も無いほど、空は厚い雲に覆われて、夕方かと思われるほど暗かつた。

『各城が中山に併合されるのを、黙つて見過ごすことは出来ない』

北山王子・賢龍は父の言葉を伝えに、家臣を引き連れ首里城の城へ来た。宣戦布告であり、命がけの登城だった。

家臣から刀を渡すよう促されたが拒否した。

賢龍の気迫は尋常ではない。

城門の警備兵は、伝令を受け賢龍等を本殿まで通した。

王の尚思紹もまた同じく刀を腰に備え、左右に武将を揃えて座し、賢龍らと謁見した。

「尚思紹殿、何故、息子の巴志殿に国を任せせるのか、不思議ですな。その粗暴ぶりが、琉球全土に名を馳せているからでしょうか」

「巴志は先の王、武寧<sup>ぶねい</sup>を倒し、中山を治めておる。その続きじや。この世を継ぐための勉強をさせておるのじや」

「それは、息子のわがままを許しているのです」

「私が國家統一を望んでいた。意思を継いでいるのだ。巴志をここへ呼べ！」

と、城内へ大声が響く。床を力強く踏みつける足音が近づいてくる。

「後は、任せたぞ」

と、尚思紹は退室し、そこに巴志が座した。

彼も刀を腰に差している。

賢龍は両手を広げ、

「巴志殿。これは、見事な城が出来上がりましたな、琉球は明國であつたかと思ひます」

「はは、南山から多くの石を集めたのじや。その上にも高見の塔も作るぞ。だが、見晴らしは今帰仁城にはかなわないものよ。さらにハンアンチ王が持つあの刀の切れ味は琉球一であろう。もっぱら城壁の石切りに精を出しているそうじやな」

「その刀は今、私が持つております」

腰に差した長刀の重みを確かめ、気を静めながら言った。

「休戦の約束を何故、一方的に破棄されたのですか、我が城まで攻める気はないであろう」

「はは、父上にこう伝えよ……我が中山に味方する軍勢は総数三千。あの名護城からは、三百騎だったかのう……今なら

嘆願を聞いてやると。そなた達が反旗を翻し、城に立て籠も

つたとしても、数百の兵、三日ともたないだろう。即、城を明け渡すなら、命だけは助けよう、そして、真下の領地を与える。いい話であろう。余生は農民として働くのもいい……

ははは、私らしくない戦い方だがな」

と笑いながら、馬鹿にした表情を賢龍に向かた。

「名護め、裏切ったな！」貴殿が裏切らせたのか

「ははは、そちの父は酒に溺れ、北の民は庄政に苦しんで

おると聞いているぞ。明国<sup>（みづき）</sup>の使から『攀安知<sup>（ハイアンチ）</sup>』という姓名を

もらったのに。おしいの。わしらは『尚<sup>（ショウ）</sup>』じや。琉球の神と

いう意味だ。わし等がこの琉球をおさめれば、太平な世じや

『国頭や羽地王らを誘惑し、そのような噂を流したのであろ

う』  
と、賢龍は反論した。

「黙れ！ 北山は日頃、兵の鍛錬にいそしんでおると聞いて

いる。お前達こそ中山を攻略し、世の平穡を脅かしておるの

じゃ」

「違う、北からの海賊に対峙するためのものである。城は真

北を向いているのを知つての話か。南は向いていない」

「海ばかり見ているから、時代に取り残されるのだ。城と兵

で海賊を倒すだと、考えが古い。我々の次の船は、完全武装

した軍艦じや」

尚巴志は、賢龍の動搖する視線を見て楽しんだ。

いつの間にか、尚巴志の隣に大君が座していた。

大君は賢龍に、語りかけるように、

「そちの連れてきた久高の神人はいつもいい働きをする。良き者を尚巴志殿に献上した。これこそ忠誠ではないか」

薄笑いを浮かべる大君の表情を、賢龍は顔を上げ直視する

ことが出来なかつた。

長刀に手を伸ばすと、それを察知した潮平が手を添えて、

その動きを制した。

「この事を攀安知殿に伝えよ。名護、国頭はもはや中山軍。

北には誰一人味方はおらぬとな！」

と、尚巴志の腹から響き渡つた声が、賢龍の心臓の鼓動を

驚づかみにした。

賢龍は怒りを込み締め無言で立ち上がつた。

賢龍は怒りを込み締め無言で立ち上がつた。

賢龍は怒りを込み締め無言で立ち上がりを

だが、倒れるほど怒りが、体を駆け巡つた。休戦期間と

は、中山にとつてみれば、力を蓄え、北山の悪評を広め、連

合軍形成までの時間稼ぎでしか無かつたのである。

信用ならない存在ではあつたが、まさか北山の配下、他の

城主らを裏切らせていたとは、してやられたのだった。

北に目を向けると、ふと、雨が降りしきつてゐることに気が

がついた。

雨粒が瓦に当たり、てんてんと音を奏でている。城内も暗くなっていた。

雨音が、自分の激しく打ち鳴らす鼓動と重なっていることに気がつかなかった。

この場で尚巴志を切りかかりたい衝動にかられた。

「そちらは、男兄弟が多からう、腹違いとは、また傑作だな。色に溺れた王じやのう。戦の後、すべて自害させてやろう。農地の取り合いは起ころまい」と、口元に笑みをこぼしながら言つた。

(おのれ、尚巴志)

賢龍の右手が刀に触れた途端、尚巴志の横のふすまが開き、左右に弓矢を射る格好をした兵士が現れた。左右の武将もゆっくりと刀を抜いて構える。

彼はそれらを見るや硬直して動けなかつた。尚巴志との凝視し合う時間が過ぎて行く。

大君が話しを切り出した。

「賢龍殿、お引取り下さい。よき軍師を与えた王子よ。私もあの者を失いたくない」

賢龍はゆつくりと手を下ろしていく。  
(愛する美久は、人質か?)

賢龍の目線が泳ぎ、動搖が見られた。

「やはり若いのう。しかし、いい男ぶりはかなわんな。はつはつはつ」

尚巴志の高笑いが首里城本殿から広がつていった。その声は、琉球全土に伝わつていくかのようだ。

賢龍とその従者は、首里城本殿を急ぎ足で去る途中、雨が降り注ぎ雷光で足元を惑わされた。

そして北殿、その部屋の前を通つた。賢龍がそこで目にしたものは、寝転がり両手両足を床に叩きつけ、のた打ち回つてゐる美久の姿だつた。

床一面には食べ物が散乱している。

「美久、美久ではないか」

賢龍は床に倒れて気を失いかけた美久を抱きかかえた。泡を口から出しつつ、目も空ろになつてゐる。

城内の役人が叫ぶ。

「水を口から注ぎ込んで、胃の中をすべて吐き出させるのじや」

白目をむいた美久の口は強く閉ざされて開かない。

医者らしき役人が無理にでも開けようとするが、手を噛まれる。

しぐさや視線は心配する様にみえる青江だが、口元は笑つ

ていた。

(何をしても無駄、明国から極秘に調達したその毒は、もうかなり溶け出しているはず。ここで死になさい)

賢龍は美久を抱きかかえた。彼女の目元は青ざめ、両手はだらりと垂れ下がった。

口を強く閉じて痙攣し始めた。

「美久！」

賢龍は彼女の耳元で、大声で呼びかけた。

口を開けようと両手で前後の歯を掴み開く。

そして右手指先を三本入れ舌を押さえ喉への通りを作る。

左手で長刀の柄を彼女の口に強引に押し入れた。

「今だ 口に水を入れろ！」

医者が水の入った壺をもって駆け寄る。

賢龍は刀の柄を美久に噛ませ、出来た口の隙間から勢いよく水を注ぎ込んだ。大量の水は彼女に吐き気をもよおさせ、すぐに口から吐き出された。

美久は自分の手で柄を払いのけ、床に倒れこみ咳をした。

「やつたぞ」

医者は目を輝かせた。

賢龍はもう一度彼女を抱え込み、口に手先を突っ込み、再び水をそそぎ入れた。

そのまま彼女の後ろからお腹を抱え込み、床に吐き出させた。

すると、黄色と赤色の溶けかかった粒、錠剤が出てきた。

医師がそれらを指で触れる。

「危ない所だった。奇跡だ。まだ、半分も溶けてはいない。

これは、異国の毒薬じゃ」

賢龍が再び彼女を抱え、同様に水をそそぎ込む。

「さあ、もう一度だ。美久」

という言葉を美久は最後に聞いて、意識が体から離れていた。それは目をもち、明国、日本、アジアが次第に見えてくる。

（ああ、やっぱ世界は広いのね）

これまで久高島の海岸で、拾い集めてきた物が動き始め、その世界で起こっている出来事、戦い、人々の暮らし、風景がその目に見えた。

やがて、地球全体の丸みが見え始めた時、父の姿がそこにあった。

「あ、お父さん、私、今、中山で仕えているの。皆を助けるために、頑張っているのよ」

美久は父に向かって近づこうとするが、父は何故かどんどん遠ざかって行き、美久に悲しそうな表情を向け続けた。

「えつ、どうして……私が嫌いなの?」

急に美久の目に、賢龍の顔が映り、騒がしい声が耳から飛び込んで来た。

美久は毒を吐き出し、意識を僅かながら取り戻してきたのだ。賢龍は美久を抱きかかえ、自分の手ぬぐいで美久の顔を拭き始めた。

彼女の眼は彼の顔をまっすぐに見据える。

「賢龍様…………これは夢では?」

「毒を食わされたのだ、危なかつたぞ」

賢龍は美久を両腕に抱きかかえ、頬を合わせた。

「ああ」

美久は未だ朦朧としている。

弟子にまぎれた青江は、悔しがる表情を見せていた。

（ああ、おしい、もう一息だつたのに）

と、青江の口元が固く閉まる。

皆が、喜んでいる中、そんな青江の表情を知る者は、賢龍の家臣、潮平を除いて誰も居なかつた。

「賢龍殿、ここでは美久様の身は危険です」

賢龍は、潮平の言葉を聞いて頷いた。

「美久よ、もう、ここは去つたほうがよい。さあ一緒に私の城へ」

賢龍は、弱々しく視線もうつろな彼女を、強く抱きしめた。

「そちが、海蛇の毒を吸い出すために私の足を切り刺した刀だ。その柄で、そなたの口をあけ続け、水を注いだ」

美久はその柄に触れた。

「この刀は、二度もお仕事をしたの」

柄は落ち着いた蒼色あおを成している。

「賢龍様、尚巴志殿に気づかれぬ内に、早く城の外に」

と、潮平は賢龍に進言した。

「美久を連れていく！」

と、賢龍は首里城北殿、その場に居合わせた役人らに大声で伝えた。

「ならぬ。この娘は、中山軍師の一人。連れ出すことは許されない！」

と、騒ぎを聞きつけてやつてきた大君がとつさに賢龍に釘をさした。

賢龍等の周りに、城の警備兵が集まってきた。

賢龍には、為す術がない。

「……必ず迎えに来るぞ」

と美久の頬を両手で包み、強引に美久に接吻をする。

賢龍の背に回していた彼女の腕は、再び氣を失うかのようにな降りていった。